

農学部におけるFDとしての課題 探求能力育成への取り組み事例

萩原 素之
農学部 (内線851-2320)
mothagi@shinshu-u.ac.jp

本学の中期目標には多くのFD項目が盛り込まれている。しかし、著者の所属する農学部では特筆すべき組織的なFD活動はなかったのが実情である。そんな中、平成15年度学長裁量経費で課題探求能力育成プログラムが実施された。筆者はこれに過去2年間関わってきたので、FDの端緒的ではあるが発展を期待する事例として紹介したい。

新入生ゼミのシラバス再編

農学部はフィールドワークとラボワークの融合を教育理念に掲げており、著者の所属する食料生産科学科は、持続的で安全な食料生産を目指しているため、「食」のフィールドサイエンス実践学習一貫プログラム」を課題探求能力育成プログラムとして策定した。本プログラムは、学年進行に従って配置される、「食」に関わる科学に臨む学生の基礎的学習能力を養成するための課題認識イニシエーション学習（1年次の新入生ゼミが該当）、生命科学から農業生産におよぶ幅広い実体験学習であるフィールドサイエンス実践学習（2年次）、実際の生産現場や研究開発の現場でのインターンシップによる課題探求能力養成プログラム（3年次）、の3つのステップからなる。本稿ではその第1ステップである新入生ゼミでの試みを紹介する。新入生ゼミは、プレゼンテーションとディベートに加えてインターネットによる情報検索、図書館の利用、レポートの書き方を追加し、シラバスを再編した。授業内容によっては、ゼミの学生人数の制約にとらわれず、学科学生全員（60余名）を1教室に集めて実施する。プレゼンテーションとディベートはセメスターの後半に置き、それ以前の週ではその基礎となる関連トピックと本学科の各講座やAFCの本学科関連分野の教育研究内容を紹介します、レポートを科す。最終段階では、プレゼンテーションやディベートのテーマに関連した課題でのレポート作成テストなどを行う。

事後評価

結論を先に述べれば、シラバス再編やそれに連動した工夫（後述）には教員側の負担増があったが、期待以上の成果をあげたと判断している。初年目は、詳細な授業計画は走りながら考える状況であったが、プレゼンテーションやディベートを実施したことに対する学生による授業評価は高かった。また、最終段階で作成させたレポートも学生の成長の跡が明瞭に読み取れるものが大多数であった。2年目は授業計画を改善（実施週の組み替え等）した。

さらに、プレゼンテーションの教育効果をより高めるため、「学生が互いに学び合う」ことを狙って、クラスの壁を越えて学科学生全員のプレゼンテーションをビデオで見るようにした（後述）点も、「他の学生だけでなく、自分の発表の様子を確認できたのは良かった」と、学生には好評であった。

実施上の工夫

授業の進行計画 プレゼンテーションやディベートの実施に当たり、進行計画表を学生および担当教員に配布した。プレゼンテーションとディベートのテーマの学生への通知は、準備期間の確保を考慮しつつやや遅めにした。授業への興味関心が偏るのを避けるためである。

Webの利用 クラス別授業、学科全体授業、PC教室での授業、図書館と授業の実施場所が多様であるため、学部Webに学科掲示板を開設し、学生および担当教員への連絡を密にした。この掲示板は、学科の修学指導関係情報の掲示にも利用した。

ゲーム感覚を取り入れる プレゼンテーションおよびディベートのいずれでも、学生も採点評価し、採点結果を授業の成績評価に用いた。また、ディベートでは、対立する論点のいずれの立場で弁論するかはくじ引きで決めた。採点評価は、弁論内容と勝敗について行い、グループが得た得点（勝利グループには勝利点を上乘せ）をグループ構成員の個人得点とすることでディベートに一種の連帯責任感を作り、他人任せの気持ちを抑制しようとした。

今後の課題

プレゼンテーションやディベートの課題設定は効果の成否を握る要点で、医学部ではチュートリアル教育として周到な計画と指導のもとにプレゼンテーションを行わせている。大いに参考にしたい。また、プレゼンテーションを採点して終わるだけでなく、より良くするには何が必要かという指針を各学生にフィードバックすることが重要である。

最後に

プレゼンテーションのビデオ収録は、学生が互いに学び合うのを狙ったものであったが、ビデオ（ディベートも一部ビデオ収録した）を見て気づいたのは、これらが良いFD用素材であるということである。授業改善の検討には授業の現状把握が必要であり、ビデオは有用である。また、「面白いから来年もやる」との声がプレゼンテーション担当教員から聞かれた。「共通教育はノルマ」という、従来ありがちな感覚からすれば、このポジティブな反応は顕著なFDである。FDというと、自分の授業にケチをつけられて叱られたりするというネガティブなイメージで捉えられがちなのではなかろうか。ポジティブイメージのFDの模索が重要である。

授業は受け手の学生の反応で如何様にも変わるインタラクティブな世界である（最初の球を投げるのは教員であることを忘れてはいけないが）。インタラクティブな世界の構築には学生の個性を知ることは重要に思える。プレゼンテーションのビデオを見ると多様な学生の

個性が垣間見え、非常に興味深い。このような学生の個性に触れた時、教員であれば何らかの触発を感じ取るものであると私は考える。プレゼンテーションのビデオを Web に掲載後、学科の全教員にビデオを見てもらいたいと考え、アクセス法を通知した。どれだけの教員が見たかは調べていないが、ビデオライブラリーとして蓄積していくことは意義深いと考えている。1つは学生に対してで、先輩学生の発表ぶりを見られるようにして、年々より良いプレゼンテーション発表になることを期待したい。もう1つは学科教員に対してで、本授業の効果の検証や改善点の洗い出しなどの貴重なFD素材になると期待する。

食料生産科学科の「食」のフィールドサイエンス実践学習一貫プログラム」は緒についたばかりであるが、年々の改良を重ねて効果の実をあげていけるものと考えている。このような自画自賛に近い評を敢えて記したのは、新入生ゼミでの取り組みは、教員の授業改善への自発的意欲が向上するようなFDのあり方をおぼろげながらも示していると感じたからである。授業を変える原動力は学生の「顔」にあると信じている。学生の顔の輝きが少しずつでも増していくことを願う。